



人車一体

エプロン通信員 藤井 真人

「ガッツ、ガッツ、ガッツ・・・」

車輪を回すときに手が車輪にぶつかる独特の音が夕暮れの陸上競技場に響きます。その中を持ち主の自己主張を思わせる色鮮やかなマシンがそれぞれの速さでトラックをぐるぐるともわり続けています。

来月13日に開催される「ぎのわん車いすマラソン大会」に出場する、車いすマラソンクラブ「タートルズ」の皆さんの練習を見てきました。大会は今回21回目を迎え、沖縄では唯一の、国内でも数少ない車いす単独のマラソン大会です。回を重ねるとともに大会の競技レベルも上がり、現在は県内外から日本代表クラスの選手も出場するようになりました。

今回初めて競技用車いすを間近で見ましたが、感想は単純に「凄い」のひとこと。アルミやカーボンの車体に競技用自転車用の車輪を組み付けた機能美に子供のように見とれてしまいました。一方で隙間のないぴったりしたシート、小さく折りたたまふ脚、風を避けるための前傾姿勢は決して楽ではないようです。それでもあのスピード感が魅力だと皆さん口々におっしゃっていました。

ひとりの方が「ためしに乗ってみる？」と言ってくださったので、もちろん乗りました。周りからは「びったりだなー」とか「あ

つらえたみたいだ」などと聞こえてきましたが、その窮屈だったこと！しかしこれが重要で、隙間があると力が逃げるし、床ずれの原因にもなるこの事。またバランスを取るのが非常に難しく、ともすれば後ろにひっくり返ってしまいそうになることや、視線が非常に低くスピードが上がってくるとそれは怖いんだよと言っていた言葉も実感しました。

主催者の方によると大会の目的は車椅子の人たちの社会参加と、車椅子競技のレベルアップならびにスポーツ振興ということでした。種目は競技主体のハーフマラソンのほかに5キロと15キロがあり、普通の車いすでも、また健常者でも参加できるこの事です(ただし今年はおう締め切られています)。様々なことがあつて今競技に打ち込んでいる人たちがいる。トラックをすべるように動き続ける姿は



人馬一体ならぬ人車一体という言葉を思い起こさせ、何か別の美しい生き物のようでした。みなさんも沿道に応援に行きませんか？

足もとの甘き泉、郷土資料館開館す



茶くわーゆんだく 67

かつて、宜野湾市民会館の二階に市立郷土資料館があったことをご存知でしょうか。郷土関係図書や民具などの、ところ狭しと並べられたこれらの資料は、宜野湾の人びとによって長い年月をかけて蓄積された歴史を後世に伝えるものです。実はこの郷土資料館が開館するまでの経緯には、私たちが市史編集係と深い関わりがありました。

1979(昭和54)年、宜野湾市史編集事業が再スタートしました。従来の編集方針と大きく異なる点は、新たに「市民参加の市史づくり」を掲げたことにあります。この「市民ぐるみ」の編集方針は、主に戦争体験の聞き書きや、民俗調査のような生活誌の記録を通じて実践されました。

このような「市民ぐるみ」の取り組みは、他方で思いがけない宝物と出会うきっかけでもありました。その宝物とは、市民の皆さまからご寄贈いただいた多くの資料や民具でした。それらの資料や民具

はやがて集積され、1981(昭和56)年11月、宜野湾市立郷土資料館が開館しました。まさしく郷土資料館は、「一チエの言う」汝の足もとを掘れ、そこに甘き泉あり」を具現したものでした。

郷土資料館は、1999(平成11)年3月に閉館し、今ではその役目を宜野湾市立博物館に引き継いでいます。その市立博物館も今年でちょうど開館10周年、これからも市史編集係ともども「甘き泉」を掘り続けていきます。



▲1981(昭和56)年11月 郷土資料館の開館祝典 当初は旧水道部庁舎(普天間)に開館しました。

『宜野湾市史』への問い合わせ
教育委員会 文化課
☎893-4430